琉球大学学術リポジトリ

日本植民地期台湾「皇民文学」の総合的研究：日本人・沖縄人の表現を中心に

メタデータ	言語:
	出版者: 星名宏修
	公開日: 2009-02-25
	キーワード (Ja): 大東亜戦争, 皇民化, 優生学, 国語, 原住民
	キーワード (En): the Greater East Asia War, assimilation, Eugenics, National language, native people
	作成者: 星名, 宏修, Hoshina, Hironobu
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/8907

「兇蕃」と高砂義勇隊の「あいだ」 ── 河野慶彦「扁柏の蔭」を読む
（『野草』（中国文芸研究会）、第７５号、平成１７年２月）

１．はじめに

1925 年 11 月、片岡巖は『台湾みやげ話』を自費出版した。総督府法院の元通訳官で、台湾研究の古典として名高い『台湾風俗誌』[26]の著者が、一般向けに執筆した同書は、全部で 51 の設問（例えば「台湾人は如何なる神仏を祭りますか」や「台湾人の音楽は何なものですか」）に答える形式をとっている。回答には「台湾風俗誌に由る」と記されているものもあり、専門書である後者からも題材がとられ、易しく解説されている。

だがこの 2 冊の書物には、難易度だけではない大きな違いがある。1184 ページにも及ぶ大著『台湾風物誌』にはほとんど触れられていないが、わずか 102 ページの『台湾みやげ話』には冒頭から登場する話題。それは、「生蕃」に対する露骨な好奇心に満ちた問答だった。そもそも同書は、「台湾に永く居人で、台湾の事を余り知らぬ為、台湾から帰て、内地の人に台湾は如何所ですか、と聞れて台湾は暑い暑い所でそれで生蕃が居りまして酷い所ですと云ふ位外話すことが出来ない人が沢山」（「自序」）いることを認め、そうした人たちを対象に、台湾の事情を平易に紹介することを目的としていた。台湾に住みながら台湾のことをあまり知らない、にも関わらず、「みやげ話」として「内地の人」に期待される話題として、「生蕃」に関するそれが選ばれるのである。

同書の冒頭の問答を見てみよう。

◎台湾には生蕃が居と云ふ話ですがど（ママ）何んなものです

此の生蕃は内地で聞きますと台湾には至る所生蕃が居る様に云ふて居ますがさう云ふ訳ではありませぬ。（中略）其風俗習慣は全く元始的で能南洋の蕃人の絵を見ることがありますが彼れと少しも異りませぬ、まあ我内地の北海道の「アイヌ」族の様なものです（中略）併し今は村落に接した所の蕃人は大に進化して稀に中学卒業したものも医学校を卒業したものもありますが之れに極僅のものであります

第二の問いと、それへの回答。

◎台湾の生蕃は人の首を馘ることが好きだと云ふが真実ですか

それは真実です併し蕃人でも山麓や又人里近い所又は宗教の為教化された所の蕃人は首は馘りませぬ。未だ教化を受ない山奥の者が多く首を馘つた者が勇者であると友に誇る為又は祖先を祭る時又は春秋の穀祭り等に神前に供ふる為に能く首狩りに出ます、此首は老若男女の区別はありませぬ何んでも人の首であれば選ばず馘るので、此の風は深山の兇蕃に残つて居ります[27]。

---

[26]片岡巖『台湾風俗誌』台湾日日新報社、1921 年
[27]片岡巖『台湾みやげ話』自費出版、1925 年、pp. 1-4。なおルビは省略した。

台湾とは「暑い暑い所でそれで生蕃が居」る所。そしてとりわけ「深山の兇蕃」は「何んでも人の首であれば選ばず馘る」、「元始的」な存在。こうしたイメージは、『台湾みやげ話』に限らず、台湾を論じる際に、繰り返し語られ表現されていた。

ところで、この本が出版された1925年とは、後に紹介するように、総督府による徹底的な軍事作戦と「理蕃道路」の建設によって、原住民、特にブヌン族の抵抗を押さえ込むことに「成功」しつつあった時期にあたる。植民地期の『台湾鉄道名所案内』を分析した曽山毅によると、旅行案内書に原住民関連の項目が登場するのは1916年版に始まり、それが急増するのは1923年版から1924年版にかけてのことだという。「山岳地域への安全なアクセス路が確保され」[28]ることで、「蕃地」とそこに住む「蕃人」が、スリリングな「観光資源」として浮上するのは、『台湾みやげ話』の出版とほぼ同時期のことなのである。

1943年11月の『文芸台湾』に掲載された河野慶彦の「扁柏の蔭」は、理蕃道路の建設中に原住民に殺害された日本人警察官の息子が、新高山を踏破し父の死の現場を訪れる物語である。作中の現在は1943年夏。主人公たちは、山中で「皇軍兵士」に志願した原住民青年と出会う。本論文の結論をあらかじめ述べてしまうと、総督府の支配に抵抗を続けてきた「兇蕃」が、過去を悔い改め、今や志願兵や高砂義勇隊として戦争に参加していく姿を描いたこの小説に、決定的に欠落しているのは、圧倒的な軍事力を背景にした理蕃政策の暴力性に対する認識である。「兇蕃」が「勇敢な高砂義勇隊」に矯め直される過程で行使された様々な暴力は、この作品からは完全に消し去られているのだ。

本論は、「扁柏の蔭」を読み解くことを目的としているが、その方法としてむしろ作品に描かれなかったものを重点的に掬いあげてみたい。東台湾の山中で実行された理蕃政策の文脈にこの小説を位置づけることで、「島都」台北とは全く異なる「植民地近代」のありようを考察したいと思う。

2．「兇蕃」に対する「戦争」

では、「扁柏の蔭」に描かれなかった理蕃政策の暴力性とは、一体どのようなものだったのだろうか。

1895年の台湾領有から1915年までの、台湾住民に対する総督府の大規模な軍事行動を、大江志乃夫は日清戦争とは異なる「台湾植民地戦争」と名づけ、次のように3つの時期に区分した[29]。

第1期（1895～1896）…台湾民主国の崩壊から全島の軍事的制圧まで。

第2期（1896～1902）…日本軍占領下で漢民族のゲリラ的な抵抗が続けられた時期。

第3期（1903～1915）…原住民に対する軍事的制圧を主な課題とした時期。これは第5代総督佐久間左馬太の任期（1906～1915）に、ほぼ重なる。

第1期と第2期で、漢民族の武装抵抗運動をほぼ鎮圧した総督府は、総面積の半分以上を占め、各種資源の宝庫と見なされていた「蕃地」を掌握すべく、新たな「戦争」を開始

[28]曽山毅「山岳地域におけるツーリズム空間の形成」『植民地台湾と近代ツーリズム』青弓社、2003年、pp. 244-246

[29]大江志乃夫「植民地戦争と総督府の成立」『近代日本と植民地 第2巻』岩波書店、1992年、pp. 5-6

する。平定すべき対象は、そこに住む原住民であった。

第3期が始まる前年の1902年に、総督府参事官の持地六三郎は、「蕃政問題ニ関スル意見」を提出。「帝国ノ禁令ニ逆ラヒ馘首横梁ヲ縦ニ」し、「納税其他ノ義務ヲ尽サヾル」原住民は、「我国家ノ叛徒」であり、「国家ハ此叛徒ノ状態ニ在ル生蕃ニ対シテ討伐権ヲ有シ其生殺与奪ハ一ニ我国家ノ処分権内ニ在ル」と断じている。

「帝国主権ノ眼中蕃地アリテ蕃人ナケレバナリ」。この一言に象徴されるように、「本島全面積ノ五十六割ヲ占メ林産ニ鉱産ニ将タ農産ニ利源ノ蔵庫」である「蕃地」は重要でも、そこに住む「蕃人」は、総督府によって「生殺与奪」を握られた存在でしかなかったのである[30]。

1910年から14年まで、「本島統制上最モ重要ナル政務」として実施された「五箇年継続ノ理蕃事業」によって、佐久間左馬太は、「南北千二百方里ノ蕃地全ク寧静ニ帰シ蕃黎十有二萬悉ク皇澤ニ霑」[31]わせることに「成功」したとされている。

『佐久間台湾総督治績概要』は、理蕃事業に精力を注いだ彼の「偉業」を顕彰するために総督府が刊行したものだが、その軍事行動の呵責なさは、使用している語彙からも窺い知ることができる。曰く「占領」。曰く「押収」。「討伐」「撃破」「撃攘」「操縦」「膺懲」「殺傷」「圧服」「焼夷」「駆逐」「処分」「威圧」…と言葉は続き、「復起ツ能ハサルニ至ラシメタル」という文言さえ、誇らしげに書きこまれているのだ[32]。

原住民に対する佐久間の容赦ない攻撃は、「其生殺与奪ハ一ニ我国家ノ処分権内ニ在ル」という考えを実行したものだった。しかし総督府の「戦争」に、絶望的な抵抗を行った原住民は、まさにそのことによって、「頑迷」な「兇蕃」と見なされ、さらなる「膺懲」の対象に数えられていく。

だが、これら一連のジェノサイドによっても、「蕃地全ク寧静ニ帰」することはなかった。1915年5月1日に総督を退任した佐久間が、台湾を離れる前日（5月12日）に花蓮港庁の山中で大事件が発生した。河野慶彦が小説「扁柏の蔭」で描いた、カシバナ事件（5月12日）と数日後のターフン事件（5月18日）である。

3．河野慶彦という作家

1906年に宮崎県に生まれた河野慶彦は、大分の師範学校を卒業後、大分県、東京府、宮崎県で教職につき、1937年に台湾に渡る。河野の死後、家族によって自費出版された『ふるさと美々津』には、「昭和十二年渡台。台南州公学校、家政女学校で教鞭の傍ら文芸台湾同人として執筆」[33]と記されている。昭和17年版の『台湾総督府及所属官署職員録』にも、「台南市寶国民学校　台南市寶町340　初等科36学級　高等科3学級　訓導　河野慶彦（宮崎）」[34]という記録がある。戦後は宮崎日日新聞社に勤務し、1984年に78歳で亡くな

---

[30]「持地参事官ノ蕃政問題ニ関スル意見」台湾総督府警察本署『理蕃誌稿第一編』1918年、pp. 179-275
[31]『佐久間台湾総督治績概要』台湾総督府、1915年、p. 7、p. 96
[32]同上、pp. 79-96
[33]河野慶彦「著者略歴」『ふるさと美々津』自費出版、1985年、ページなし
[34]台湾総督府編『昭和十七年十一月一日現在　台湾総督府及所属官署職員録』台湾時報発行所、1943年3月、p. 643

った。

1940年1月に創刊された『文芸台湾』に、彼の文章が初めて載るのは、第5巻第1期(1942年10月)なので、同誌との関わりはさほど早くはない。しかしその後、河野の作品は『文芸台湾』に頻繁に見られるようになる。筆者が確認できた、植民地時代の河野の文章は以下の通り。

発表年月	掲載誌	巻号	タイトル	備考
1942.10	文芸台湾	5-1	鶏肋	アンケートへの回答
1943.3	文芸台湾	5-5	台南地方文学座談会	
1943.4	文芸台湾	5-6	流れ	
1943.6	文芸台湾	6-2	眼	辻小説
1943.7	文芸台湾	6-3	湯わかし	
1943.9	文芸台湾	6-5	手紙	
1943.11	文芸台湾	6-6	扁柏の蔭	
1944.1	文芸台湾	7-2	皇民感情の純化	決戦会議での発言
1944.1	文芸台湾	7-2	思想戦への結集	
1944.1	文芸台湾	7-2	とんぼ玉	
1944.3	生死の海		年闌けて	台湾出版文化株式会社
1944.6	台湾文芸	1-2	文学者としての蹶起	
1944.6	台湾時報		ララチの夜	
1944.6	台湾時報		雑記	編集後記
1944.6	台湾時報		呂赫若論	作品集「清秋」について
1944.8	台湾文芸	1-4	油田地帯を廻つて	派遣作家の感想
1944.8	旬刊台新	1-4	抑留	
1944.8	台湾時報		油井をめぐりて	
1944.11	台湾文芸	1-5	鑿井工	情報課委嘱作品
1944.12	台湾文芸	1-6	十月十二日	辻小説
1944.12	台湾文芸	1-7	編集後記	
1945.1	台湾文芸	2-1	編集後記	

こうして見ると、台湾における河野の文学活動は、わずか2年余りに過ぎないが、この短い期間にかなり精力的に作品を発表していたといえるだろう。『文芸台湾』のリーダーであり、短編集『生死の海』の編者でもある西川満は、河野について次のように述べている。

> 河野慶彦君は、河合三良君とならんで今の台湾でもつともうまい小説を書く人のひとりである。これほどの力倆は決して一朝一夕でうまれるものではない。事実、文学経歴も古い。しかも近年の著しい精進の跡は、私たちを叱咤して余りある。この作者にはすでに「扁柏の蔭」と云ふ傑作があるが、「年闌けて」またしみじみと燈下ひも

どくにふさはしい佳篇であらう[35]。

西川によって高く評価された「扁柏の蔭」とは、いったいどのような「傑作」だったのだろうか。

4.「扁柏の蔭」 ── 語られることのない20年の「空白」

小説「扁柏の蔭」については、窪川鶴次郎による次のような同時代評が残されている。

「扁柏の蔭」(河野慶彦)　前作「湯わかし」とは作風がすつかり異なつてゐる。重厚の感はあるが、文章が硬くて少し読むのに骨が折れる。台湾で教師をしてゐる「私」と、その遠縁の、近く大学を卒業して軍隊に入る重見とが、新高山を登破する記行文である。しかしこの旅は、重見にとつては長い間の念願が叶つて父の永眠の地を弔ふためであつて、そのやうな意味が重見の文についての物語と共に作品の基調をなしてゐる。

一巡査として未開の奥地皇化のために殉職したこの父の物語は、今殉職の現場を旅しつゝある子の重見を中心にして、たゞ一人の我が子を自分だけの手で育てゝ来て今は御国に捧げようとしてゐる母の姿を、父在りし日の妻として、私の心の中に強く思ひ出させようとする。しかし物語は、事実の一応の説明に止まつてゐる。私はいよいよ、内地人のさまざまな生活の経歴と事情とを背後に引いてゐる渡台生活史ともいふべき作品を読みたくなつた[36]。

窪川が簡潔に要約したように、この小説は、語り手の「私」が、遠縁の大学生重見順三と共に、「新高山を登破する記行文」というスタイルをとっている。順三の父親は、台湾東部の山地に勤務する警察官だったが、八通関越理蕃道路の建設中に原住民に殺害された。その死からおよそ20年を経た今日、まもなく軍隊に入る順三は、「今生の名残に、幼児よりあこがれの地たりし台湾の土を踏み、且は父の霊永久に眠る地を訪れたい」という願いをかなえるために、新高山に登ることになったのである。

小説は、「私」と順三の新高山紀行を作中の現在(1943年夏)として設定し、その中に、順三の父親である直三の物語を挿入している。しかし直三の死から今日までの約20年間に、東台湾で発生した一連の出来事は、ほとんど描かれない。夫が死に、順三の母が幼い息子を連れて郷里に帰った後、この地で何が行われたのかについて、作中の誰もそれを語らない。

新高山紀行の宿泊先のひとつであったターフン駐在所で、巡査と小学校の校長から、この地域の歴史を「私」たちは聞くことになるが、そこで語られたのも、ブヌン族による度重なる駐在所襲撃事件と、それとは対照的に高砂義勇隊の志願者を生み出す今日の「安定」ぶりだけなのである。「アリマン・シケンもラマタ・センセンも帰順し、蒙昧粗暴であつ

[35]西川満「跋」『生死の海』台湾出版文化株式会社、1944年、p. 225

[36]窪川鶴次郎「台湾文学半ヶ年(1) ── 昭和十八年下半期小説総評『台湾公論』1944年2月、pp. 108-109

た山の者達も、教化を受くるに従つて、皇化に浴し、今は皇民たるの喜びの中に生業に従事し、これらの事件も今は昔語りになつたのである」というように、現在の「成果」が強調されるものの、彼らがいかなる「教化を受」けてきたのかは、ついに述べられないのだ。

だが、語られなかった20年の歳月の中で、「兇蕃」は高砂義勇隊へと「矯正」されたのである。「蒙昧粗暴」な「兇蕃」と高砂義勇隊の「あいだ」には、いったい何があったのだろうか。

まず東台湾の山中で命を喪った重見直三について、述べておこう。

「私」と同郷の重見直三は、郷里でも有数の商家の跡取り息子として生まれ、クラリネットや自転車競争に熱中するような青年だった。父親の決めた縁談に反発した彼は、恋人と共に台湾に逃げる。巡査となった直三は、実家の者に連れ戻されるのを恐れ、辺鄙な東海岸の山地勤務を自ら志願するが、理蕃道路の建設中に原住民に首を馘られ、あっけなくこの世を去ってしまうのだ[37]。

直三が命を落とすことになった「八通関越理蕃道路」は、ブヌン族による駐在所襲撃事件をきっかけに、その建設（1919年6月～1921年10月）が決定されたものである。

「扁柏の蔭」にも触れられている通り、台湾東部に位置する花蓮港庁の山中に初めて駐在所が設置されたのは、1911 年のこと。当時「奥地統治の要衝」であるターフン社には、ブヌン族の「兇蕃」アリマンシケンが、「執拗に当局の手を悩まし」ていた。総督府は彼らの抵抗を抑えるため、狩猟生活に不可欠の銃器押収に着手する。そうした中、1915年5月12日にカシバナ駐在所、5月18日にはターフン駐在所が相継いで襲撃され、あわせて17名の警察官が殺害された[38]。事件の背後に、アリマンシケンとその兄ラホアレがいると考えた総督府は、山奥深くに逃れた彼らを「討伐」するために、軍事作戦のための道路建設を決定。「大正八年台東、台中両州庁から入山した路線調査隊の作業了るや直に工事に着手し」[39]た。これが「八通関越理蕃道路」である。

「工事が相当奥地に進んだ頃から、道路隊の襲撃、交通者の狙撃などが、多くなったのである。重見の父の殉職もこの道路工事中の出来事で、沿線幾多の碑も、皆この当時の尊い殉職者であつた」と小説にも記されているように、この道路は、「未帰順蕃タル「ブヌン」族ノ占居地域ヲ横断スルモノ」[40]だったため、彼らの激しい抵抗を引き起こした。完成後の道路沿線には、30 カ所の駐在所が設置され、「東部台湾ノ開発促進ハ勿論同方面蕃族ノ

---

[37]直三の例からも分かるように、台湾とは様々な理由で日本で生活しづらくなくなった者たちの、脱出先のひとつだった。在台日本人作家にとって、そうした人々の運命は、決して他人ごとではなかったはずである。河野慶彦が、『文芸台湾』に最初に発表した小説「流れ」（1943年4月）には、実母との関係のこじれから、逃れるように台湾にやって来た大工が登場するし、新垣宏一の「山の火」（『文芸台湾』1943年4月）も、生活力のない主人公が、「何処かに逃げ出したい気持」を押さえきれずに台湾に渡り、原住民を使って籐の採取をする日常が描かれている。

[38]「「ターフン」駐在所ノ蕃害」台湾総督府警務局『理蕃誌稿第四編』1932年、pp. 13-18

[39]毛利之俊「八通関越警備道路」『東台湾展望』東台湾暁声会、1933年、ページなし
なお、総督府は「理蕃道路」の建設と同時期に、警務局に飛行班を設置（1919年）し、「蕃地威嚇飛行」や「蕃地爆撃」を繰り返し実行した。空から爆弾を投下された「蕃社」は、「其猛烈なる炸裂を実見し、所有銃器を提供して帰順を哀願するに至つた」という。藤崎濟之助『台湾の蕃族』国史刊行会、1930年、p. 640

[40]「八通関越蕃地横断道路ノ起工ト花蓮港庁作業隊ノ蕃害」『理蕃誌稿第四編』、pp. 516-517

制圧」[41]に、大きな威力を発揮する。こうして東部山中の奥深くまで、「警察官空間」が出現し、そこに生きる原住民を監視と教育の対象としていくのである[42]。

「理蕃道路」の完成後、アリマンシケンは、一族を率いて高雄州旗山郡の奥地「タマホ」に脱出したものの、度重なる飛行機からの爆弾投下や大砲による砲撃などを受け、1930 年 11 月に「帰順」を決意する。その後は、「克く官命を奉じ、衆に率先して農耕に励み善良な蕃人として晩年を全うし」[43]、1935 年に 57 歳で死亡した。

アリマンシケンの兄で、「最後の未帰順蕃」といわれたラホアレも、1933 年 4 月に高雄州庁に出向き、「帰順式」を挙行。「之に依り本島蕃族中には所謂未帰順蕃なるものが無くなり普く広大無辺の皇化に浴することになつた」[44]。1941 年 6 月に 72 歳で死去[45]。

一方、「本島理蕃の癌」[46]と称され、最も頑強に総督府への抵抗を継続した「イカノバン」社のラマタセンセンも、1932 年 9 月に発生した「大関山事件」の犯人とされ、同年 12 月に逮捕されてしまう。1933 年 1 月、「多年ノ懸案タリシ未帰順蕃ノ巣窟イカノバン一帯ノ解決」[47]を果たした理蕃当局は、「既定方針（「イカノバン」の居住禁止）を実行すべく、「ラマタ」一族を首め在住蕃人の既存家屋の焼却、耕地作物の蹂躙などを」[48]断行した。事件後、ラマタセンセンら「兇行蕃人十名は死刑処分をせず霧社事件の例に倣らひ留置処分を為すことに略決定し、兇行者を出したイカノバン社はリラン山及びエバコに移住させることになつてゐる」[49]と報じられたが、その後の消息は、全く伝えられていない。

総督府を悩ませ続けたアリマンシケン、ラホアレ、そしてラマタセンセンというブヌン族の名だたる「兇蕃」たちは、1933 年の春までに、すべて「帰順」、もしくは逮捕された。こうして理蕃道路の建設によって形成された「警察官空間」は、「未帰順蕃」の消滅によって東台湾全体に拡大した。その後、この地では、強制的な集団移住と、原住民に対する徹底的な「国民教育」が展開されたのである。

原住民集落の集団移住は大正期から始まっていたが、それが本格化するのは、1933 年 8 月、つまりラホアレの投降からわずか 4 ヶ月後に、『蕃人移住十箇年計画書』が作成されてからである。山中に分散して居住している原住民を、駐在所の監視下に置くことが最大の目的だった。また、「狩猟ヲ事ト」する生活を捨てさせ、「定地耕ニ就カシメ」ること

---

[41]「八通関越道路完成」台湾総督府警務局『理蕃誌稿第五編』1938 年、pp. 145-146

[42]施添福「地域社会與警察官空間 ── 以日治時代関山地方為例」『東台湾郷土文化学術研討会』2000 年、p. 1

ターフン事件に対する総督府の報復は、八通関越理蕃道路の建設だけでは終わらなかった。「花蓮港庁玉里支庁管内ターフン社蕃人は、先年駐在所襲撃以来、未だ我招撫に就くに至らなかつたので、是等の兇蕃膺懲の目的を以て、玉里分遣隊に行軍を請求せしに、大正十年五月より同年十二月下旬まで、将校以下百五十名ターフン社に駐屯し、此間に於て兇行蕃二十余名の処分を了するに至つた」。同注 14、藤崎濟之助、p. 849

[43]「兇名を謳はれたアリマン病死す」『理蕃の友』理蕃の友発行所、1936 年 2 月、p. 8

[44]「理蕃史上画期的記録　タマホ社の帰順」『理蕃の友』1933 年 5 月、p. 10

[45]「頭目ラホアレ死す」『理蕃の友』1941 年 8 月、pp. 6-7

[46]瀬野尾寧「サクサク砲台と原警部の遭難」『蕃界稗史 殉職秘話』自費出版、1935 年、p. 221

[47]浅野義雄「大関山蕃害事件の完結」『台湾警察時報』台湾警察協会、1933 年 11 月、p. 93

[48]浅野義雄「大関山蕃害事件の顛末（六）」『台湾警察時報』1933 年 7 月、p. 104

[49]「兇行蕃人十名は留置処分に決定　イカノ蕃社は移住か」『台湾日日新報』1933 年 1 月 14 日

で、「平地ノ文化ニ接近セシメ、而テ彼等ノ野性ヲ脱却」[50]させるという文言に明らかなように、伝統的な生活方式の改変を通じて、彼らの価値体系を自己否定させることも目論んでいた。ラマタセンセンの拠点であった台東庁関山地方に住んでいたブヌン族は、1942年までに人口の69%が集団移住を強制された。大規模な移住によって山地の風景までもが一変したという[51]。

1930年の霧社事件によって、総督府は理蕃行政の刷新を迫られ、翌年12月に「理蕃政策大綱」が制定される。「理蕃は蕃人を教化し其の生活の安定を図り一視同仁の聖徳に浴せしむるを以て目的とす」[52]という第一項に示されているように、原住民は「其生殺与奪」を一方的に握られた存在ではなく、「教化」の対象として位置づけ直された。つまり、「彼等の弊習を矯正し善良なる習価を養ひ国民思想の涵養に意を致」（第四項）すために、新たな教育体制が求められることになったのである。

原住民に対する教育の担い手は、警察官であった。各地の駐在所には、四年制の教育所が設置され、巡査が教員の役割を果たした[53]。「警察官空間」が東台湾全体を監視下に置く中で、原住民児童の就学率は、漢民族児童と比べても格段に高く、「国語」習得も高いレベルを示した[54]。日本人巡査が原住民の言葉を話そうとしないにも関わらず、授業が成立した背景には、「先住民児童の「学習」意欲」があることを、北村嘉恵は指摘している。原住民の「智能の低さ」や「蒙昧」をあげつらうことで、そうはなるまいと努力する子どもたちの意欲を、総督府は掠め取ったのである。『理蕃の友』には、「最後の未帰順蕃」ラホアレが率いていた「タマホ社」出身の青年の、次のような発言が掲載されている。

> 高雄　石田良民君　我がタマホ社蕃人は全島で一番遅れて居る蕃社で昭和八年に始めて帰順したものであります。其の他のブヌン同族もよく世の中の事がわかりません。ですから我等青年は大いに自覚して社衆を導き、一日も早く皆さんの地方に追ひつく様にしたいと思つてゐます[55]。

原住民の青年エリートは、「「悔い改めた蕃人」として、統治者日本の強いるイデオロギーを鼓吹すること」[56]が期待されていたと、宇野利玄は述べる。とりわけブヌン族や霧社事件を引き起こしたタイヤル族の青年たちには、自らの祖先の「愚かさ」を率先して批判することが求められたのである。

---

[50]警務局理蕃課『蕃人移住十箇年計画書』1933年。山路勝彦「「文明化」への使命と「内地化」」『台湾の植民地統治』日本図書センター、2004年、p.145より再引用。
[51]同注17、p.28
[52]鈴木作太郎『台湾の蕃族研究』台湾史籍刊行会、1932年、pp.495-505
[53]北村嘉恵「蕃童教育所の教員が巡査であったこと」『日本台湾学会報 第6号』日本台湾学会、2004年6月
[54]『高砂族の教育』台湾総督府警務局、1944年、p.31、p.50
[55]「理蕃史上光輝ある一頁を飾る　高砂族青年団幹部懇談会」『理蕃の友』1935年11月、p.3。この発言に対して、「兇雄ラホアレに統率されて頑強に反抗を続けて来たタマホ社にも、今や広大無辺なる聖恩が及んでゐる」とのコメントがつけられている。
[56]宇野利玄「台湾における「蕃人」教育」『台湾霧社蜂起事件』社会思想社、1981年、p.108

もうひとつ、1944年に出版された『拓け行く皇民（高砂族児童綴方選集）』から、「台東庁チヨカクライ教育所三年 パザゾロン彌次郎（十一歳）」の作文「オトウサンノハナシ」を紹介しよう。

昔私共ノソセンハ大ヘン悪イ人ガオホカツタトイフコトデアリマス。自分達ガ働キナガラ同ジ所ノパイワントモ戦ツテ居タサウデス。戦ツテマケル人ハクビヲトラレテ、サウシテトツタクビハ自分ノ家ノマエデ持ツテ帰ツテ又自分ガマケナイヤウニオ祭リシタサウデス。（中略）教育所ニ入学シテ、国語モ語ル事カ出キルヤウニナルト良イ日本人ニナリマスカラ、アリガタク感ジテ居マスト昔ノ年ヨリガ言ヒマス。

昔ノ悪イコトハ、今私達教育所デベンキヤウシテヰル人ガナホサナケレバナリマセン。

昔ノ年シヨリハ本当ニ悪カツタ。

ナンニモナイ、ツマラナイコトバカリシテヰマシタ。私共年ヨリモ今ハ一日モコノ国家ノ者トワカツテ忠義ヲシナケレバナラナイ心ガアリマス[57]。

（波線、傍点は原文のまま）

1944年に11歳という作文の書き手は、「理蕃政策大綱」以降の教育体制の中で成長したはずだ。「私共ノソセン」は「ナンニモナイ、ツマラナイコトバカリシテヰ」たこと、今後は、「良イ日本人ニナ」り、「忠義ヲ」果たすよう努力すること、こうしたことを原住民の子どもたちに内面化させることが、「国民思想の涵養」にほかならなかった。

そして大東亜戦争期において、「良イ日本人ニナ」る最も「正しい」方法とは、志願兵や高砂義勇隊として、戦場に赴くことだったのである。

「扁柏の蔭」の中にも、志願兵に志願するブヌン族の青年が登場する。兄はすでに高砂義勇隊に行き、自分も志願兵志願中だというターフン駐在所勤務の23歳の警丁は、「ブヌンは昔は乱暴しました。智慧が低くて、分からなかつたのです。今はもうすつかり変りました。（中略）私の兄さんは国防献金をしました。そして、大臣から賞状を頂きました。（中略）私は陸軍の志願兵になります。この前玉里に行つて身体検査をしました。」と、誇らしげに「私」たちに語るのである。

5．新高山にて

本論の最後に、「私」と重見直三の、新高山登山の「現場」に戻ろう。

大東亜戦争のただ中で、新高山に登るという行為は、父親が殉死した場所を訪れるということ以外に、含意されたものはなかったのか？また帝国最高峰の新高山に登るという行為は、いかなる条件のもとで、可能になったのだろうか？

先に紹介したように、窪川鶴次郎はこの作品を、「新高山を登破する記行文」と言い、「文章が硬くて少し読むのに骨が折れる」と感想を述べた。私も「扁柏の蔭」を初めて読んだ時、くどいまでの風景描写や植物名の列挙に、できの悪い登山ガイドを読んでいるような

[57]パザゾロン彌次郎「オトウサンノハナシ」『拓け行く皇民（高砂族児童綴方選集）』南方圏社、1944年、pp. 57-59。「チヨカクライ教育所」は、パイワン族の児童が通った教育所である。

錯覚を覚えたほどだ。実際、「私」たちの旅程は、当時刊行されていたガイドブックに掲載されたルートを、忠実に辿ったものなのである[58]。

元来、ブヌン族の制圧を目的として建設された八通関越理蕃道路は、「山岳地域への安全なアクセス路」（曽山毅）として、新高山への登山道に変貌した。「はじめに」で述べた通り、1920 年代の半ばから新たな観光地として「蕃地」が浮上するのだが、30 年代に本格化する集団移住は、登山活動に対する人為的危険性（「蕃害」）を排除することにもなった。

また 1930 年代には、台湾における国立公園の設置と連動して、登山が大衆的なスポーツとしてブームになる。日中戦争が拡大し、皇民化運動が推進されていた 1937 年 12 月、大屯、次高タロコ、新高阿里山の 3 カ所が国立公園に指定された。国立公園は、時局柄、銃後国民の体力錬成の場と見なされ、登山も単なるレジャーではなく、「体位向上」の手段だと見なされるようになったのである[59]。

登山の大衆化にともない、多くの登山案内書が出版され、同時に自らの登山体験を、各種メディアに発表する機会も増大した。1926 年には、公学校の「国語」教科書に、「新高山」が単元として登場する。また 1944 年版の初等科国語教科書に収録された「新高登山」は、「日本で一番高い所を歩いてゐる」ことへの「ほこらしい気持」や、山頂付近で高砂族の青年に出会う場面など、「扁柏の蔭」とよく似たエピソードが織り込まれている[60]。教科書に描かれた新高山は、そこがもはや「安全」な場所に変わったこと、すなわち総督府のコントロールが全島すみずみにまで及んだことを、台湾人児童に納得させる役割を果たした、と林玫君は分析している[61]。小説にも、花蓮港の女学校の生徒グループが新高山に登ったという記述があるが、これもまた「蕃害」に悩まされた過去とは対称的に、女学生でさえ登山が可能だという、現在の「安全」性を裏づけるはたらきをしているのだ[62]。

1930 年代半ば以降、原住民はもはや登山者に危険をもたらす存在ではなく、「風景」の一部として絶好の見物対象になった[63]。大東亜戦争期に出版されたガイドブックには、「台湾山岳の特色」と題する以下のような文章がある。

> 原始文化観景は台湾の高砂族が作る所の生活景観であつて、元来が狩猟生活様式を離れぬ彼等の人となりと部落や其の他の事柄は、風景からいつても全く独自な別世界的、魅惑的のものであり、又登山の立場からいつても異民族であり原始文化民族である彼等と、警察官と登山者から成る一隊が山を越え谷を渉り曠原を行き野営する気分と光景は、立派なエキスペデイシヨンであつて、恰もヒマラヤ遠征の気分になるとさへいはれてゐる。之等は古来開け切つた日本内地や諸文明国にゐた者の最大の興味であらう。要するに台湾山岳は其の形成、景観非凡にして特異なるものあり、原始民族を山民として有し、新高山の一部その他僅かの高山が大衆化されただけで、未知の処女境少からず、然も理

---

[58]『台湾鉄道旅行案内』東亜旅行社台湾支部、1942 年、pp. 163-167
[59]林玫君「日本帝国主義下的台湾登山活動」台湾師範大学体育学系博士論文、2004 年、pp. 276-277
[60]「新高登山」台湾総督府『初等科国語七』1944 年、pp. 85-93
[61]同注 34、p. 150
[62]同上、pp. 165-166
[63]1935 年に刊行された『台湾の旅』には、「蕃界視察は台湾旅行上最も興味ある一つであります。各蕃社の情勢は至つて平静で些しの不安もありません」と記されている。『台湾の旅』始政四十周年記念台湾博覧会、1935 年、p. 33

蕃事業の成功によつて今日殆ど全く安心して登山をなし得、且つ尚蕃地登山の場合は未だ常に遠征気分になれる、といふのが特長なのである[64]。

「全く安心して」かつ「常に遠征気分になれる」台湾の山岳。1930年代から新高山登山が大衆化していった背景には、「蕃情」の安定だけでなく、もともとは理蕃道路であった登山道や阿里山鉄道が整備され、交通アクセスの利便性向上、各地に点在する駐在所に付設された宿泊施設の充実など、登山を支える物理的な条件が整っていったことが大きい。もちろん、登山者の荷物を廉価で運んだり、さらなる道路整備に労働力を提供する原住民は、「全く独自な別世界的、魅惑的」な「風景」の一部となることを期待される一方で、登山の大衆化には不可欠の存在となった[65]。

「扁柏の蔭」にも、新高山の山頂付近で「荷物を背負つた」高砂族の青年とすれ違い、彼らの側から「明瞭な発音」で「今日は」と声をかけられる場面が描かれている。『台湾鉄道旅行案内』には、登山者の「心得」として、「高砂族に対しては異民族扱ひをせずに同胞として愛してもらひたい。彼等は山の道で行き過ぎても必ず明瞭な日本語のあいさつをする」[66]という注意がなされていたが、小説でも、「「今日は。」と私達も親しみを籠めて答礼」するのである。

だがここで見逃せないのは、登山の最終日に蕨駐在所から卓麓へ向かう途中で、道路作業に従事している20名ほどの原住民とすれ違う場面である。

新高山踏破の旅程で、初めて制服を着ていない原住民と出会った「私」は、「この一群は何か無気味に感じられた。にこりとも笑はぬ、鈍い、しかし怒つたやうな表情で、通りかゝつた私達を見てゐるのであつた」と、その不安を隠そうとしない。それまで遭遇した原住民が、警察の制服を身にまとい、快活に志願兵への憧れを語ったのに対して、「生蕃」絵はがき[67]そのままの「肩から、袖のないチヨツキのやうな布をかけ、腹をつき出し、褌の前を垂らしてゐ」る男や、「赤黒い肌の上に、ネル地のやうな赤縞の襦袢のやうなものを着て、布を頭に巻いてゐ」る女たちは、その表情とあわせて「何か無気味」で「私」の恐怖心をかき立てるのである。

すでに無害化されたはずの原住民に対する、この「いわれのない」恐怖は、総督府が宣伝し、河野自身も作品に描いてきた「安全神話」の脆さを露呈させかねないものだった[68]。

---

[64]「台湾に於ける登山の注意」同注33、『台湾鉄道旅行案内』、pp. 14-18

[65]そもそも、「未帰順蕃」を武力制圧するための理蕃道路自体が、原住民の労働力によって作られたものだった。言うまでもないが、彼らは、警察官の指揮のもと強制的に動員されたのである。王学新・許守明「日治時期東台湾地区原住民労働力之利用」『東台湾研究』第4号、東台湾研究会、1999年12月。小説中にも、トマス駐在所の巡査が、道路補修のために原住民を日常的に使役していることを語っている。

[66]同注39、p. 18。「高砂族」は同じ文章の中でも、ある時は「異民族であり原始文化民族」と見なされ、別の箇所では「異民族扱ひをせずに同胞として愛してもらひたい」と指摘されていることは見落とせない。結局、原住民とは、「日本人」に一方的に定義づけられる存在でしかなかったのだ。

[67]1910年代に台湾では8枚1組で20銭の絵はがきが販売され、台湾への旅行客や台湾在住の日本人に歓迎された。その題材には、原住民を撮影したものが圧倒的に多かったという。松本暁美「序」『台湾懐旧』台湾・創意力文化事業有限公司、1990年

また絵はがきに撮影された原住民イメージについては、陳芳明「殖民地社会的図像政治 ── 以台湾総督府時期的写真為中心」『殖民地摩登』台湾・麦田出版2004年を参照。

[68]大東亜戦争を目前にした1941年3月、台東庁関山郡で、ブヌン族による駐在所襲撃事件(「内本鹿事件」)

しかし河野は、理蕃政策の「達成」に対する懐疑に結びつきかねないこうした不安感を、これ以上突きつめて描こうとしない。「一ばん年長者と思はれる老爺」が、「今日は。」と「表情も変へずに言」い、「一斉に、そこにゐた男女が今日は、と連呼」する中を、「私」たちに通り過ぎさせることで、この問題は回避されてしまう。わずか2年前に発生した内本鹿事件のような、総督府に対する原住民の反撃可能性をどこかで感じていたからこそ、作者は「私」の恐怖心を封印させたのではないだろうか。

そして最終目的地の玉里を目前にして、「私」は「何かしら人間の沢山ゐる世界に出ることの喜びのやうなものが、心奥にうづうづと湧き起つてきたのであつた。娑婆のなつかしさといつたやうなものであつた。阿里山を出てからは、山の宿の人、駐在所の巡査と警丁以外の人に絶えて逢ふことなく、人間の聚落を見なかつた旅の後で、人間の群り蠢いてゐる町を遠望した時、言ひ難い人間臭への思慕を感じ」る。10日ぶりに「蕃界」を抜け出し安堵する「私」の脳裏に、山中で出会った「無気味」な原住民の姿が甦らなかったとはいえないだろう。

小説の最後は、玉里を間近にした地点での、次のようなふたりの会話である。

> 突然重見は言ひ出した。
>
> 「伝説ですね。父のことも、ターフン事件も、ラマタ・センセンも、アリマン・シケンも、みんな伝説ですね。」
>
> 私は彼の長い間の父親への思慕と、父を奪つた自然と、人とに対する数々の思ひの中から、突然言ひ放つたこの言葉に感動した。
>
> 「さうだ。伝説だ。」
>
> と私も言つた。昔語りなのだ。すべて、昔々の話なのだ。沿道の数多い殉職者の碑の中には、××戦死の地と書かれたものもあつた。しかし、もはや、その何処にも硝煙の臭は感じられなかつた。先人の尊い血に、感謝せずにはゐられなかつたが、現実は、それが身近かなものと思はれないまでに変りきつてゐた。これは国生みの伝説の一つなのだ。ラマタ・センセンも、アリマン・シケンも、長髓彦と同じ、遠い昔の人の名前なのだ。私はさう考へた。

長髓彦とは、神武天皇率いる「皇軍」と最後まで戦い、天皇の弓にとまった金色の鵄の放つ光に目が眩んで滅ぼされた、伝説上の「ぞくのかしら」[69]である。

だが、わずか10年前のラマタセンセンやアリマンシケンとの抗争を、神代の「国生み」の「昔語」と同一視することは可能だろうか。「現実は、それが身近なものと思はれないまでに変りきつてゐた」と作者は書く。しかし、「兇蕃」が「蟠踞」していた東台湾が、「安全」な「警察官空間」へと「変りきつて」しまうまでに、どのような力が行使されたのかと問うことが、実は重要だったのではないか。

が起き、即死者3名、負傷者3名の被害を出した。この事件は、「蕃情の安定」を誇っていた総督府に、大きな衝撃を与えた。「台東庁の蕃地で蕃害事件惹起」『台湾日日新報』1941年3月14日

[69]「八咫烏と金の鵄」『初等科国語二』台湾総督府、1944年、pp. 6-12 。ちなみに金鵄勲章は、この故事に基づいて作られたものである。

原住民に対する「戦争」と、それに続く強制的な集団移住や「国民教育」の暴力性を作品に書き込むことは、1943 年の時点では困難かもしれない。それでもなお河野の記述は、東台湾で発生した一連の出来事を、遙か歴史の彼方へと押しやり、「伝説」という曖昧な言葉をあてがう「忘却の暴力」であることは、指摘しておかねばならないだろう。

もう一点、この小説の問題点を指摘するならば、重見直三の個人的な死が、生者たちによって利用されていることである。ごく個人的な理由で、つまり親の決めた結婚から逃れるために台湾にやって来て、生活の手段として辺鄙な土地での警察官を選んだにすぎない直三の死（それ自体は痛ましい悲劇であることは間違いない）は、「私」によって、「この中央山脈で台湾の統治に尊い血を捧げ、護国の人柱となつて眠つてゐる」と読み替えられ、息子からも「八通関道路沿線の英霊の碑を一々思ひ起して、私は父の死が尊いものであることが分か」ったと解釈されてしまう。

「護国の人柱」としての「尊い」死。折しも熾烈な戦いのさなかにあった大東亜戦争も、新たな「国生み」と呼ばれ[70]、更なる「尊い」死者を貪欲に要求していた。直三のあくまでも個人的な死までも「護国の人柱」にすり替える河野の筆は、まもなく戦地に赴く順三や高砂義勇隊の青年たちを、近い将来において「尊い」死を死ぬべき存在として、拘束してしまうのである。

1943 年 11 月、「大東亜戦争の完遂に筆を剣として蹶起せる戦士」[71]たることを決議した「台湾決戦文学会議」が開催された。会議に参加した河野慶彦は、「台湾の文学も亦戦陣に加はるためには大いなる脱皮をしなければならないのだ。禊である。皇民文学としての禊をしなければならないのだ」[72]と感想を書き記している。この会議と時を同じくして発表された「扁柏の蔭」という「傑作」（西川満）は、まさしく「皇民文学としての禊」の名にふさわしい作品として、時代とともにその役割を終えたのである。

---

[70]今村冬三は、膨大な大東亜戦争期の詩から読み取れる戦争観として、「大東亜戦争は神話の再現もしくは創造であるとするもの」を指摘している。『幻影解「大東亜戦争」』葦書房、1989 年、p. 59
[71]台湾文学決戦会議「決議」『文芸台湾』終刊号、1941 年 1 月、p. 37
[72]河野慶彦「思想戦への結集」『文芸台湾』終刊号、1941 年 1 月、pp. 55-57